

一有之、彼人即昇置深谷中、任其生死、絶跡不敢省視矣、我方五島及熊野、亦無痘疹、偶有疾之者、則昇置山中、倩他鄉人使以養之、兄弟親戚亦不省視云、是非飲食之故也、蓋風土之所致也已、

〔東遊記上〕蝦夷人多くは病なし、たま〜病者あれば、家にすて置て、外に避く、醫藥なければ、病いよいよ重りて、必死す、よりにて病を恐る、事甚しく、疱瘡といふもの、昔しはなかりしが、近頃はたまたまにあり、是もすて避て、養生を加へず、必死す、疫癘も左の如し、これらはあしき風なるべし、死を恐る、事甚しいといへ共、死するまふけは常にわすれず、

〔捨芥抄下末觸穢〕一弔喪、問病到山作、所遭三七日法事者、當日不參入内裏、

〔永正記上〕一神氣所勞禁忌事

疫病禁忌七十五日過明也、是殺鬼神之所爲也、故甲疫之内爲穢而已、弔喪問病者、上古者、三ヶ日忌之、延喜式以後當日之憚云々、

〔造伊勢二所大神宮寶基本記〕伊勢太神宮神主、大小内人、祝部等諸祭之日、僧尼、重服奪情、從公之輩、并輕服人、與同宿往反齋日、犯弔喪問疾等、六色禁忌者、宜科上穢云々、

〔日本書紀二十三舒明〕息長足日廣額天皇、淳中倉太珠敷天皇、敏孫彦人大兄皇子之子也、略中即天皇起臨之、詔曰、朕以寡薄久勞大業、今曆運將終、以病不可諱、故汝本爲朕之心腹、愛寵之情、不可爲比、其

國家大基、是非朕世、自本務之、汝雖肝稚、慎以言、乃當時侍之近習者、悉知焉、略中當是時、思欲語叔父及群卿等、然未有可道之時、於今非言耳、吾曾將訊叔父之病、向京而居豐浦寺、

〔日本書紀二十七天智〕八年十月乙卯、天皇幸藤原内大臣家、足親問所患、而憂悴極甚、乃詔曰、天道輔仁、何乃虛說、積善餘慶、猶是無徵、若有所須、便可以聞、對曰、臣既不敏、當復何言、但其葬事、宜用輕易、生則

無務於軍國、死則何敢重難云云、時賢聞而歎曰、此之一言、竊比於往哲之善言矣、大樹將軍之辭、賞詎可同年而語哉、